
四季

幼みこみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

四季

【コード】

N0903K

【作者名】

幼ぬこみ

【あらすじ】

庭園に点在する月の名前を持つ十二の宮の物語。

札配り

札配り

その庭園は、わたしの想像するような小さな箱庭ではなく、大きな箱庭だった。もう少し分かりやすくすれば、小さな地区と言ってもいいほどもあり、綺麗な正方形の敷地の中で、時計の円盤のような形で、十二の宮が存在する。その宮の中には、五人の人が住んでいる。その内訳は、頭と呼ばれる者が一人、宮を司る草木が一人住み、中に住む者を守る防人が一人から三人。後は宮によってそれぞれ異なる。

ここでわたしがその方に伺ったのは、何故、そのようにして彼らが住んでいるかだった。しかし、その方もよく分からないという。その方どころか、住んでいる彼ら自身も、実は真相は知らないという。しかし、固く守られてきた掟の数々を破ることはなく、ひたすら、ただひたすら、時を過ごしているという。もはや彼らには自分達が何年の間、その庭園で、その宮で、暮らしているのかは覚えておらず、静かな時のなかで、はしやぎ回る草木達を眺めながら、穏やかな一年を繰り返し、繰り返し、遠ざかる記憶を顧みる事もなく、繰り返し、繰り返し、終わりの見えない平穩の人生を辿っているらしい。

彼らがどうしてそんな暮らしをしているのか、勿論わたしには分からない。けれど、その事には何か意味があるのかも知れない。あるとしたら、どんな意味があるのかは分からないけれど、きっとそれは、とても大事なことで、絶対不可侵を守るべき物事であるような気がした。その方はのほほんと庭園についてを語り、今までも、これからも、彼らの日々の平穩は揺るぐことのないものであると主張したが、わたしはそれを素直に受け取ることが出来なかった。もしかしたらその時、私の瞳には、庭園の隅に隠れる何者かの影を、

眼を、爪を、牙を、捉えていたのかもしれない。庭園を遊び回る草木達を、煌々とした瞳で縛り続ける誰かに、気付いていたのかもしれない。

だけど、わたしがその違和感の正体を掴むより先に、山札は配られ、手札が舞い込んでしまったため、わたしは何も言えず、じつと時が過ぎるのを待つて、見守るしか手がなかった。それを悔やむ事も出来ず、言われるがままに札を引き、終わりを待つことしか出来なかった。そんなわたしを彼らは許してくれるだろうか。そんなわたし達を彼らは許してくれるだろうか。愛しくもわたし達を慕ってくれた彼らは、見守ることしか出来なかったわたし達を、許してくれるだろうか。

今も変わらずに供えられる三つの草木の束が、手札を握るわたしの心を深く抉る。弱いわたしを許して欲しい。強くないわたしを許してほしい。その声が、彼らに届いているのか、否か。

表菅原

表菅原

庭園は、麗らかな春の精を尊び給う如月の宮にて、《あかよろし》の衣をまとう《赤衣》より、防人として仕えるユキキエとハツハナにその命が下ったのは、今年に入って三十回余りであった。今年といっても、時はまだ、冬至を越えて、十五夜を越すか越さないかといった折、ユキキエもハツハナもほとほと呆れたが、それ以上に如月の宮の《赤衣》は何年も何年もその命を下させる二人の防人と、その命の因子である如月の宮の草木である《梅》に対して失望していた。

如月の宮の頭首《鶯》よりも恐ろしいと評される如月の宮の《赤衣》とだけあって、ユキキエとハツハナは、今までも命を受けるなりそれはもう血相を変えて《梅》の居場所を探しつくしたものだ。自由奔放の限りを尽くす《梅》であったが、春の精の御子とも言われる《梅》である事だけは重々自覚しているらしく、そう易々と他の季節の宮へと渡り歩いたりはしないと、いった理性は保つてくれているらしい。

だが、いつ。その理性が、どんなひよんな事から雨入り宜しく打ち消されてしまうかは計り知れず、ユキキエもハツハナも大きな不安を宿したまま、春の宮々を探しまわった。今回も同じく。願わくば、自分達の宮である如月の宮内において欲しいのだが、それが叶うわけもなく、結局二人は同じく春を崇める睦月の宮、弥生の宮へと訊ねなくてはならなくなった。効率の良さだけを考えるならば、ユキキエとハツハナが別れて、一人ずつ他宮を訪ねれば早いのだが、ただの防人が、それも年端もいかぬ幼霊が他宮を訊ねるなど、どんな強敵を前に戦うよりも恐れ多く、心細い事であり、事前に何も言わずとも、二人はくつついて、このような仕事を仰せつかった原因

である愛らしくも憎たらしい我らが草木を探して、まずは睦月の宮へと訊ねたのだった。

同じ頃、春の宮の頭首達である睦月の宮の《鶴》、如月の宮の《鶯》、弥生の宮の《幕》は、春の精を祭る春霊殿にて、他季節の宮頭の耳に届かぬよう、ひっそりと会合した。同じ頭首でも、五光である睦月の宮の《鶴》と弥生の宮の《幕》は各上であり、何かしらある時でも、如月の宮の《鶯》は二人の決定を仰ぎ、それに従うしかなかった。しかし、今回の会合の内容が、寄りによって、そんな如月の宮の草木の問題であったので、《鶯》は白肌の頬を真っ赤に染めて、俯き加減に会合に参加していた。だが、そんな《鶯》を慰めるかのごとく、《鶴》は言った。

「如月の宮の《梅》だけの問題じゃなかるう。我が宮の愛しき《松》もまた然り」

その言葉にすぐに、弥生の宮の《幕》が、妖艶な眼差しを細くし、告げる。

「それはまた奇遇なこと。春の精はこうも御転婆な御方であるかや。我が宮の愛しき《桜》もまた然りと来たものよ」

その二人の言葉に、《鶯》の心を縛ってた縄が、ふと緩められた。三宮の草木を縛りとめるのは、《赤衣》の役目と決められていたが、彼女らばかりに任せるというのも気が引けるもので、また、その草木の横暴に心を悩ます《赤衣》達が、罪もない防人達を厳しく責め立てるところを見聞きし心を痛め、さらに、追いつめられた《赤衣》達がいつしか各々の草木を絞め殺してしまうのではないかと案じていた為、三頭は各々の草木について、どう処遇すればよいのかを話し合った。

「思うに、草木達には枷が足りぬと」

そう主張するのは《鶴》だった。

「放し飼いにしすぎること、《赤衣》や防人達の気を押し潰すのは罪深きことぞ。ここはいったん、頑丈な枷を彼らに施し、各々の宮の奥深くに幽閉すべきであろう」

「幽閉はあんまりでございます」

己の《梅》がきっかけで話題となっていることも忘れ、《鶯》はすぐに反論した。確かに、己も、《赤衣》も、防人達も、自由奔放すぎる草木に惑わされ、苦勞を課せられているものの、彼らの行いは、悪気から生まれるものではなく、ただただ楽しい事を求める余りの行動であるだけ。それを幽閉で押し固めるのは、如何なものかと疑問を起こした。

しかしながら、《鶴》が自分よりも格下の《鶯》の話聞くはずもなく、己の宮の《松》こそは、同じ事をすればそう施すと躍起になり、如月の宮の《赤衣》の耳にも入るようにするとまで言い張った。

そう言われてしまえば、《鶯》の手に負えるものではなくなる。《鶯》直属の如月の宮の《赤衣》ではあるが、その《鶯》よりも格上の《鶴》がそう言ったと知れば、彼女が事を起こしたしても、《鶴》の一声が理由に挙げられてしまえば、《鶯》には責めることも出来ないだろう。睦月の宮の決定は、ほぼ等しく、如月の宮の決定でもあった。

だが、《鶯》が困っているそこへ、《幕》はお淑やかに告げた。

「本来、春の精は自由自在に風に乗る、世に陽を撒く御方。その御方の御子を暗い宮の奥底に閉じ込めるなど、罰あたりもいいところ。それならば、わたくし、《幕》は、愛しき我が《桜》を幽閉などせず、鎖をつけて《赤衣》に託しましょうぞ」

「神聖な春の御子に鎖をつけると言うのですか？」

これにも《鶯》は反論した。鎖をつけられて行動を制限された己の宮の《梅》を想像すると、今までの横暴も吹っ飛び、不憫以外の感情を抱けなくなった。やはり彼らは自由奔放な春の御子である。春の御子である以上、多少放任となっても、彼らの事は放っておくべきなのではないだろうかと《鶯》は思った。然しながら、《鶴》も《幕》もそうは思わず、《鶯》の放任を却下した上に、どちらの意見を採用するかを迫ってきたのだった。

《鶴》と《幕》に棲まれた《鶯》が困っている頃、ユキキエとハツハナは睦月の宮にたどり着いた。すぐにその宮の防人であるサミドリとトシハを訪ねた。

「我が宮の《梅》はおりませぬか？」

新年に入り、三十回余りの質問に、サミドリもトシハも苦笑しかけたものの、いつ己らの《松》も同じことをしでかすかは分からないことだったので、必死に笑みをこらえ、首を振った。

「我らは見ておりませぬ。それならば我が宮の《赤衣》にもお尋ねを」

三十回余り聞いた回答に、ユキキエもハツハナも苦笑しかけたものの、先を急がなければならなかったため、「すまぬ」と短く礼を言って、すぐに睦月の宮の《赤衣》を訪ねた。二人の姿を見るなり、睦月の宮の《赤衣》は《あかよろし》の衣の袖を軽く振り、先走って答えた。

「妾は見ておらぬ。《松》に聞くがよい。睦月の宮の池のほとりて遊ぶと告げておった」

ユキキエとハツハナは迅速な回答に礼を言いつつ、自分の行き先を告げる睦月の宮の《松》の偉さを羨ましがり、早足で睦月の宮の大池のほとりへと向かった。すると、睦月の宮の《赤衣》が言った通り、《松》が一人で遊んでいた。

「《梅》はおりませぬか？」

二人が問うと、《松》は万華鏡のような目で不思議そうに二人を観察し、金魚のように口をぱくぱくさせた。よく耳を澄ませば、その口から言霊が発せられているのが分かる。精霊の御子の言葉とだけあって、とても聞き取り辛いけれども、普段より《梅》と関わっているユキキエとハツハナであるので、どうにかその言葉を解することが出来た。

「さっきまでいたけど、どっかいつちゃった。睦月の宮から出ちゃったと思うよ」

そうと聞けば、もう此処にいる理由もない。《松》に深々と礼を

言い、ユキキエとハツハナは次なる宮、弥生の宮へと向かった。

その頃、春靈殿では、《鶴》と《幕》の対立の狭間にて、《鶯》は身動きの取れない状態で、二人の口論を仰いでいた。最終的には自分がどちらの意見に沿うのかを問われるのだと思うと、今から心苦しく、いつそこから逃げ出したいと思ったのだが、身体的にも精神的にもそう出来ない状況にあった。普段より、年下で可愛らしい顔立ちの《鶯》を宮に招き、年長女として愛でている《幕》が、《鶯》の力ない手のひらを握っているのだ。その為、《幕》が背中を押せば、いつでも二人の板挟みにされる状態となっており、《鶯》は気が気でなかった。一方、《鶴》は《鶴》で、格下とはいえ、控え目で従順な《鶯》を気に入っていた。その為、同性であることをいいことに《幕》が《鶯》を一人占めすることを普段より妬み、今の状況もまた、《鶴》は気に入らなかった。《鶴》と《幕》がぶつかればぶつかるほど、《鶯》の立場は危なくなっていく為、ひそかに《鶯》は、さつさと《梅》が見つかるようにと願った。

《鶯》がいよいよ《鶴》と《幕》の間に放り出されるかという頃、ユキキエとハツハナは弥生の宮へとたどり着いた。たどり着いてすぐ、防人よりも先に弥生の宮の《赤衣》に出会った。弥生の宮の《赤衣》はやはり睦月の宮の《赤衣》と同じく、二人の顔を見るなり、《みよしの》の衣の袖で半分顔を隠し、言い放った。

「《梅》は見ておらぬ。我が宮の防人か《桜》に聞いておくれや」
ただ、弥生の宮の《赤衣》は、防人の居場所も、《桜》の居場所も教えないままに、宮の奥へと引つ込んでしまった。仕方なく弥生の宮をうろつかせて貰ううちに、先に弥生の宮の防人であるカゲツとユメミと出会い、すぐに訊ねた。

「我が宮の《梅》は来ておりませぬか？」
カゲツとユメミもまた三十回余り聞いた質問だったが、彼らは特に感情も表わさず、呆気なく答えた。

「《梅》の方ならば、我が宮の《桜》と共に遊んでおりました。弥生の宮の中庭を覗いてくださいまし」

「有難う」

また逃げられては困るので、ユキキエも八ツハナも急いで弥生の宮の中庭へと急いだ。《梅》を無事に捕獲した後は、また急いで如月の宮に戻り、如月の宮の《赤衣》へと報告せねばなるまい。きつとそこで遅いと短く罵られるに違いないのだ。その罵り度合いを少しでも和らげるには、一刻も早く《梅》を捕獲する以外にない。せかせかと辿り着いた中庭には、希望通り、《桜》と遊び回る《梅》がいた。いきなり侵入してきたユキキエと八ツハナに、《桜》は万華鏡の目で不思議そうな表情を送り、《梅》は同じ万華鏡の目であからさまに不機嫌な表情を送ってきた。

「《梅》や、《赤衣》が御怒りですよ。今すぐに戻りましょう」「嫌じゃ。もう少し《桜》と遊んでから帰る！」

「どうか、御慈悲を。《鶯》様も御困りです。《梅》が帰らねば、春霊殿から抜け出す口実が無いとお嘆きでしょうよ」

「《鶯》はもつと《鶴》と《幕》に弄ばれたつていいぞ」
じつとこちらを見ていた《桜》がそんな事を言い、《梅》がけたけたと笑う。ユキキエと八ツハナは呆れかえり、つかつかと二人に近づいた。

「ちつともよくありません。仮にも《鶯》様は如月の宮の頭首様でございますよ。さあ、《梅》や、すぐに帰って《鶯》様を御助けにあげましょう」

「嫌じゃ、嫌じゃ！ 今帰れば《赤衣》に打たれてしまうのではないか！」

「今帰らねば《赤衣》に喰い殺されてしまうでしょう」
さらりと言い放ったその脅しが効いたのか、《梅》は口を嚙み、上目づかいでユキキエと八ツハナを見やった。

「ユキキエと八ツハナは、《梅》を守ってくれるか？」
控え目に訊ねるその声に、二人の防人は小さく笑んだ。

「勿論、勿論、我々共々《赤衣》に怒られましょう」
独りきりで怒られるわけではないと分かったためか、《梅》はや

つと力を抜き、笑顔を取り戻した。

「それなら帰ってもいいぞ！ 《鶯》を救ってやろう！」
「もう帰っちゃおうの？」

空かさず《桜》が詰まらなそうに言ったが、《梅》は笑顔で頷き、
《桜》の方に手を置いた。にこりと笑みを深め、告げる。

「また遊ぼう！ 今度は如月の宮にも遊びに来ておくれ」

「その時はぜひ、弥生の宮の《赤衣》に告げてからにしてくださいまし」

ユキキエとハツハナが空かさず付け加えると、《桜》は笑顔で頷き、《梅》に別れの言葉を告げた。《梅》がすっかり帰る気を起こしてくれた事で、ユキキエもハツハナも、大きな安堵感を孕みながら、今より盛大に叱られる事をぼんやりと考えた。

《梅》がちゃんと戻った事を確認した如月の宮の《赤衣》は、半ば軟禁されている《鶯》を救出するために、さっそく《梅》を連れて春霊殿へと向かった。だが、その中で状況を想像した後、春霊殿へと向かう足をわざとゆっくりにし、時間を稼いでやった。その為、《梅》がちゃんと戻った時間よりもずっと長く、《鶯》は《鶴》と《幕》の間に挟まれて苦しむこととなり、《赤衣》と《梅》が春霊殿の扉を叩き、解放した時には、《鶯》はすっかりやつれてしまっていたらしい。《鶯》を屈伏出来ないままに《梅》が見つかったことに、《鶴》と《幕》は、特に《幕》のほうは、不満そうであったが、元々この会談自体、《梅》がいなくなった事によって始まったのだから、その《梅》が見つかった以上、別に続けなくてもよいという流れになり、《鶯》はやっと解放された。

ただし、あとで宮に来るようにと《鶴》にも《幕》にも命ぜられたため、気苦労からは解放されなかったのは言うまでもない。

そんな事となっても、事の発端となった《梅》の奔放さを憎むこともなく、のほほんと見守る《鶯》に、如月の宮の《赤衣》も、ユキキエとハツハナも呆れたという。特に《赤衣》は、後に《鶴》と《幕》の提案した策を耳にし、そのどちらかを許可するようにと《

驚に迫ったのだが、それはまた違う話である。

猪鹿蝶

猪鹿蝶

どんな物事よりも、五光という存在の力の見え隠れが、水無月の宮の頭首である《蝶》には耐えがたい事だった。そもそも、夏の精霊を崇める卯月の宮、皐月の宮、水無月の宮の三宮には、一人も五光の頭首がおらず、皐月の宮である《八橋》に至っては、どの頭首ともあまり関わり合おうとせず、夏の三宮の力など顧みないような女だった。彼女の連れている《菖蒲》^{あやめ}もまた、水無月の宮の《牡丹》を誑かし、何度注意してもふらりと出てしまうので水無月の宮の《青衣》もすっかり困ってしまい、防人共々、その見事な紫苑の衣を泥まみれの埃まみれにして、《牡丹》を連れ帰ってきた事もあった。彼らには危機感が足りないのだ。春霊殿も秋霊殿も冬霊殿も力があり、自分達の夏霊殿だけが力が弱く、三殿の意向に従う他ないとなっているのだ。これに不満がないはずがない。何故、自分達の宮には、力ある頭首がないのだろうか。《蝶》は嘆いた。

それにしても、皐月の宮の《八橋》も、卯月の宮の《杜鵑》も、危機感がなさすぎて呆れてしまう。《杜鵑》はまだ、如月の宮の《鶯》や、葉月の宮の《雁》と繋がりがあって許せる。特に、葉月の宮の頭首は五光の一人であらせられる《月》なので、とても心強い。しかしその一方で、《八橋》ときたら、他の季節を崇める宮々を軽蔑し、あまり関わろうとしない。事あると、すぐに己の宮の《赤頭巾》を幽閉し、《蝶》やら《杜鵑》にまで、口を出す始末で、《蝶》にとっては全く理解し難い。さらに、《菖蒲》が《八橋》の真似をして、他の宮の悪口を言うものだから、《蝶》はそれが五光の人々の気に障るのではないかとハラハラしていた。彼女の宮の《赤頭巾》もまた、卯月の《赤頭巾》や文月の《赤頭巾》恋しさに皐月の宮を抜けだし、あとで大目玉を喰らう事もある。その度に、《

蝶」と《杜鵑》は、皐月の宮の《赤頭巾》を庇うのだが、その時にはすでに、《赤頭巾》の綺麗な身体に痛々しい痣が出来ている後であつたりするので、いつも早く駆けつけられなかった事を後悔させられる。そんな夏の宮の日々は、知らず知らずのうちに《蝶》の心を蝕み、病ませていく。

しかし、《蝶》にも心の拠り所となる者達はいた。文月の宮の頭首である《猪》と、神無月の頭首である《鹿》だった。彼らは《蝶》が日々の生活で追い込まれている事を理解しており、いい相談相手として《蝶》を傍から支えていた。《蝶》もまた、二人に感謝し、誰かが悩んでいる時は、いい相談相手としての役割を務めた。話し手に共感する姿勢は勿論だが、何よりも、《蝶》の内外面の愛らしさが、《猪》と《鹿》の心を癒した。それは《蝶》にとつても同じで、《猪》の男らしい逞しさ、《鹿》の頼れる姐御肌あひだに幾度も安心感を与えられては回復してきた今や、二人とも掛け替えのない存在となつていた。特に、《蝶》のささやかな願いは、《猪》と《鹿》の関係についてであり、二人だけいる所をこっそりと見守つては、微笑ましく去ることもしばしばあつた。だが、二人が《蝶》に気付けば、絶対に彼女を邪魔者扱いせずに、暖かく受け入れてくれるため、ついつい《蝶》は彼らに甘えがちになつてしまふ事もあつた。二人とも違う季節を崇める宮の者であるので、自粛する部分もきちんとあつたのだが、夏の三宮の行く末についての不安だけは抑えきれず、度々、《猪》と《鹿》に打ち明けていた。

「あたしがこんな不安を持つだけで、《八橋》は怒るでしょうよ。彼女は自分の《菖蒲》すらも、思い通りに行かないと打つてしまうのだから」

「しかし、夏の御殿の立場が弱いのだとしても、それを《蝶》が悔やんだり責任を感じる必要はないと思うぞ」

すぐに《猪》がそう言い聞かせるが、《蝶》は受け入れない。それもそうだろう。年末年始の五光の会合に、夏の三宮の代表が一人も出られない不安など、自分の季節に五光がきちんといる《猪》に

も《鹿》にも、想像でしか分からない事なのだ。それを唯一同じように分かるはずの《八橋》は、《蝶》を理解するどころか否定してしまう。《杜鵑》では、《蝶》のよき理解者になれない。そうなれば、彼女の嘆きを真に理解し、諭す事が出来る者など、彼女以外にいないのだ。結局のところ、《猪》にも《鹿》にも、《蝶》が再び立ち上げられるまで寄り添っている事しか出来ない。否、むしろ、それだけでいいのだ。

「何かある事に、《八橋》は他の宮の悪口を言うの。《菖蒲》ですらもよ。この間は、春の御殿の悪口を言いだしていて、とても冷や冷やした。《八橋》はきつと、自分達の宮と他の宮の事をちゃんと理解していないのよ」

言いたい事を言えば、少しは落ち着くかもしれない。《蝶》はそう思い、《鹿》と《猪》の横で、思っている事をどんと吐き出していった。やがて、その愚痴が《八橋》の残忍性と無知を責めるかのような方向へと定まった時、《蝶》はふと寒気を感じ、会話を中断した。突然《蝶》が喋るのを止めたので、《鹿》も《猪》も驚いて、《蝶》を窺った。だが、《蝶》は彼らに答えるより先に、自分のやってしまった事や、今この場で起きてしまった事を知ったので、頭が真っ白になり、暫くその場所から目を離せなくなってしまった。彼女がちらりと確認したその影は、間違はなく、《菖蒲》の姿をしていた。皇月の宮の《菖蒲》だ。自分が《八橋》の悪口を言っていると思われたかもしれない。いや、言っていた。そんなつもりはなかったのだけれど、勢いの余り、悪口ともとれる発言をしてしまった。

「どうしよう……」

言葉を再び発した時、真っ先に出た言葉はそれだった。何度も窺ってくる《鹿》と《猪》に慌てて無難な返しをし、《蝶》はすぐに適当な理由を付けて水無月の宮に帰る事にした。これ以上《鹿》と《猪》を巻き込むのは迷惑にもほどがある。そうでなくても普段より愚痴の犠牲にしているのだから、巻き込むだけは止めるべきだ。

そう思ったので、まずは二人から離れる事にした。もしも《菖蒲》がそのまま《八橋》に告げ口をしてしまったのならば、防人の守る水無月の宮へと戻るべきだと分かっていた。特に、二人きりで《八橋》と鉢合わせになるのはまずい。とてもまずいことだ。そんな悪い想像ほど当たりやすいということなのだろうか、たった今、《八橋》に鉢合わせした事を想像したばかりなのに、水無月の宮へと向かう出会い頭で、《八橋》と鉢合わせになってしまったのだった。

「おやおや、《蝶》かえ。そんなに急いで何処に行くんだい？」

《八橋》の態度は普段とあまり変わりなかった。きつとまだ《菖蒲》から聞いていないのだろう。だとしたら、すぐに適当に分かれて、一目散に水無月の宮に逃げ込めば済む。

「ちよつと用事を思い出したの。さつさと宮に帰るところよ」

「ほう、用事ね。どんな用事が気になるところね」

「急ぎの用なの、失礼するわ」

そう言つて、《八橋》の脇を通り抜ける。さりげなく急いでいる様子を上手く演じられたと思った。後は、一刻も早く水無月の宮に逃げ込むだけ……だと思つたのだが、その希望は、《八橋》に腕を掴まれた瞬間、砕け散つた。

「あなたの急ぎの用なんてどうでもいいわ。探していたの。ちよつと臯月の宮までいらつしやいな」

「離してちよつだい。あたしは仮にも水無月の宮の頭首よ」

「ええ、知つてるわ。だから何？ 何があるの？」

《八橋》の目を見上げてみて、《蝶》は口を噤んだ。彼女の目。

その目が、一瞬にして、《蝶》を凍らせてしまった。彼女はとつくに知っていたのだ。《菖蒲》から聞かされていたのだ。その目に秘められているのは、怒りを通り越した何か。彼女が開き直っている以上、ここに第三者がいけない以上、《蝶》に抗う術はなかった。それほどもで、今の《八橋》の力は強く、気迫はもつと強くなっていた。

「急におとなしくなつてくれたわね。御話しした事があるから、こ

のまま宮までいらつしやいな」

そう言つてほほ笑む《八橋》の顔が、《蝶》の目に焼き付けられた。その冷徹な笑みは《蝶》の心からを凍らせてしまったため、その後、皇月の宮に連れ込まれ、宮の奥底へと閉じ込められてからも、しばらく自分がどういふ状況下にいるのか、正しく理解できなくなつていた。《菖蒲》が何度も覗きに来ては、笑い物にして帰るといふ事を繰り返しても、《蝶》は怒りの感情すら産めずに、ただただじっとしたまま、《八橋》によつて閉じ込められた時間を浪費していった。

その後、水無月の宮は大騒ぎだった。なんせ、頭首である《蝶》が行方不明になつてしまつたのだ。《青衣》と防人のマツカゼとナルカミは、文月の宮と神無月の宮を訊ねた。《蝶》がいなくなつた事を知つて驚いた二人の頭首は、さつそく宮の者達に協力を仰ぎ、自分達も《蝶》を探し始めた。しかし、いくら探しても、一向に《蝶》の足取りは掴めないままだった。誰もまさか一宮の頭首である《蝶》が、他の頭首に囚われているなどとは思ひもせず、その上に《蝶》もまた、《八橋》の眼力によつて、見つけてもらうという努力を出来ずにいるため、ますます《蝶》は見つかることなく、時間だけが過ぎていくこととなつてしまつた。

そんなある日、卯月の防人のコノハトリとナツハは、皇月の宮の防人であるサナエとサミダレから、妙な話を聞いた。それは、水無月の宮の怪奇をコノハトリとナツハが他人事としてサナエとサミダレに切り出した事により露見した。《蝶》の名前を出したことによる彼らの妙な反応は、コノハトリとナツハの心に深く残り、二人は早速それを卯月の宮の《赤頭巾》に報告した。その後、それを不審に思つた《赤頭巾》は卯月の宮の頭首《杜鵑》に報告した後、皇月の宮の《赤頭巾》にそれとなく訊ねたが、激しく否定されてしまう。その出来事を卯月の宮の《赤頭巾》から聞いた文月の宮の《赤頭巾》は、すぐに自分の頭首である《猪》に報告し、やつと《猪》と《鹿》は、皇月の宮の怪しさに気付き始めた。すぐさま、文月の宮の

防人であるオミナエシとナナヨ、神無月の宮の防人であるコハルとシグレが、隠密に臯月の宮へと送られた。四人はそれぞれ怪しまれぬように、各々の草木である《萩》と《紅葉》を探すふりをして、夏の三宮の敷地へと入り、臯月の宮へと近づいた。しかし、すぐに防人のサナエとサミダレに見つかってしまった、例え草木を探すためだとしても、侵入は拒みたいという頭首の強い願いから、見つけたら送り届けると強く押され、内部まで確認できずに終わってしまう。それぞれ報告を受けた《鹿》と《猪》は、密会し、話し合った。「自分達が犯人ですと言っているようなものじゃないか」

《鹿》の言うとおりだと《猪》は思った。次々と上がる不審な点を見て、《蝶》を手中に収め、それを必死に隠そうとしていると思われるでもない事だと思った。ただ、ここで困ったのは、《八橋》という人柄である。彼女は、他の季節を称える宮を毛嫌いしている。そんな人物の所に《鹿》と《猪》が説得に行ったところで、相手にされないのも無理はないだろう。況してや、《蝶》が普段より仲良くしていたような人物たちだ。興奮した《八橋》が、《蝶》に何をしでかすか分かったものじゃない。

「ここは卯月の宮の協力を仰ぐべきだと思うのだが……」

しかし、果たして上手くいくのだろうか。心配だった。そもそも卯月の宮の頭首とはあまり関わりがなく、あったとしても、文月の宮の《赤頭巾》を通してであるので、迅速な話し合いなど望めるものか怪しいものだったからだ。しかし、自分達の耳に、臯月の宮の不可解な噂が入り込んできたのも、元はと言えば卯月の宮の《赤頭巾》からであったので、不可能な事ではないと踏み、さっそく《猪》は己の宮の《赤頭巾》に、卯月の宮の《赤頭巾》を通して協力を願う事を命じた。文月の宮の《赤頭巾》よりその事を知った卯月の宮の《赤頭巾》は急いで己の宮の頭首である《杜鵑》にそれを告げた。《杜鵑》は前よりその相談が舞い込む事をまるで予見していたかのように、話を聞く間、原稿を見ながら同じ内容を耳にしているかのように、ふむと相槌を打っていた。さて、《杜鵑》は早速、自

ら皐月の宮に訪ねてみたのだが、《八橋》は知らぬ存ぜぬと激しく応答し、皐月の宮の《赤頭巾》についても、卯月の宮や文月の宮の同じ《赤頭巾》にまで口を閉ざす始末で、さらにその宮の防人のサナエとサミダレの許しが通らず、なかなか内部へと侵入出来なかった。すっかり困り果てた《杜鵑》からの通達を耳にし、《猪》も《鹿》も肩を落とした。

「もうこうなれば、強行にての交渉しかなかるう」

《鹿》の呟きを否定する論拠も見つからず、《猪》は深々と首肯するのみだった。

同じ頃、不甲斐無い結果を己の宮の《赤頭巾》に持たせた《杜鵑》は、すっかり自信を喪失し、仲の良い如月の宮の《鶯》と葉月の宮の《雁》にそつとその心内を告げた。何よりも皐月の宮の対応に驚いた《鶯》と《雁》は、さつそく協力を考えるものの、なかなかいい案は思いつかず、結局、夏の宮の敷地へととぼとぼと帰る《杜鵑》の背を見送ることしか出来なかった。

しかし、その出来事を《鶯》は弥生の宮の《幕》に、《雁》は己の宮の頭首である《月》に相談した事により、その出来事がやつと五光の耳に入る事となった。ただ、《幕》も《月》もそれぞれ他の者がどれだけ知っているか知らず、一人だけでは動けぬと困っていたところ、長月の宮の頭首である《盃》より誘いがあり、三人で晩酌をすることとなった。互いに盃を交わす三人は、とりとめもない話を零し合いながらその雰囲気ごと酒を味わい給っていたが、ひよんな事より、《盃》によって、文月の宮の《猪》の元氣のない事が話題に上り、はつと《幕》も《月》も思い出し、最近耳にした皐月の宮の暗鬱な噂についてを話題に挙げた。《幕》も《月》も自分以外にその話を聞いた者がいる事に驚き、まさ、《盃》は初めて聞くその話に驚いた。ただちに、《幕》と《月》は、事実確認と称して文月の宮の《猪》と神無月の宮の《鹿》にその事を問いただした。五光の者が二人も来たとあっては、《猪》も《鹿》も何事かと緊張を顕わにしたが、二人が《蝶》を救うために有益な動きをしている

事が分かると、この上なく心強い事はないと、《鹿》は《猪》から、《猪》は己の宮の《赤頭巾》から聞いたと告げた。文月の宮の《赤頭巾》は、卯月の宮の《赤頭巾》から聞いたと告げた。ただちに《幕》と《月》は卯月の宮を訪ねた。卯月の宮の頭首《杜鵑》もまた、五光から二人も訪ねてきたことに驚いたものの、理由を知ってすぐさま協力の姿勢を見せ、卯月の宮の《赤頭巾》を呼び寄せると同時に、臯月の宮を訪ねた時の事を話した。その後、卯月の宮の《赤頭巾》と防人のコノハトリとナツハによって臯月の宮の不審を知った二人は、すぐさま五光の他の者を呼び寄せ、これまでに手に入れた情報を、他の《鶴》《番傘》《鳳凰》へと告げた。

同じ頃、《猪》と《鹿》は、五光が追い風につく事を知って、強気の態度に出始めた。まず、普通なら絶対に企てない他宮への侵入を自ら試みたのだ。まず、文月の宮の《赤頭巾》を使い、臯月の宮の《赤頭巾》に用があるといつて堂々と侵入させた後、神無月の宮の防人であるコハルとシグレが別門より侵入、さらに、別所より、文月の宮の防人であるオミナエシとナナヨが侵入することで、もう別所より、神無月の宮の《青衣》が侵入し、臯月の宮を手薄にし、さらに最後に堂々と正面より《猪》と《鹿》が入り込んでいくといった乱暴なものだった。これも、五光という強力な追い風が吹いていることと、《蝶》が必ずこの場所に囚われているという絶対的確信によるものだった。次第に、騒がしくなる臯月の宮の内部にて、度々あがる《八橋》の狂乱じみた叫び声に竦みつつも、《猪》と《鹿》は慎重に、宮内にて《蝶》を捜した。しかしなかなか見つからず、落ち着きなく動きまわる《八橋》の影に緊張しながらも、追い風を信じて捜し回り続けた。

一方、この異変は《蝶》の耳にも届いていた。すぐさま外より覗いてくる《菖蒲》に声をかけ、何が起こっているのかを訊ねた。《菖蒲》はというと、この中に連れ込まれて以来、初めて《蝶》に話しかけられたのですっかり嬉しくなって、素直に「侵入者らしい」と答えてやった。《蝶》は大層不思議がった。この庭園に外部から

侵入できるものなどいるのだろうか、いや、恐らくないだろう。いたとすれば、それは、神仏か妖怪の類であろう。ならば、その侵入者とは、他宮の者であるに違いない。しかし、一体誰が、侵入したというのだろうか。一瞬だけ浮かび上がった期待を、《蝶》は必死に抑え込んだ。期待をすればするだけ、裏切られた時の失望が大きくなる。ならば、今までと変わらず、じつと自分を殺して、無心で時を過ごそう。そう感じ、口を閉ざした。

さて、確実に《猪》と《鹿》は《蝶》の幽閉されている場所へと近づいていたが、そのことはすでに《八橋》に感づかれており、他の侵入者の対応をしていたサナエとサミダレ、さらに、文月の宮の《赤頭巾》の対応をしていた己の宮の《赤頭巾》を呼び戻し、《蝶》の隠されている部屋を守らせようとした。しかし、間に合わず、すんでのところで自ら一人で《猪》と《鹿》の前に飛び込み、その行く手を阻んだ。

「そなたら、誰の許しを得てこの場にいるやら。即刻、立ち去るがよい」

すこむ《八橋》に、《鹿》は鼻で笑い飛ばす。

「それなら、私からも問う。そなたは誰の許しを得て、水無月の宮の頭首である《蝶》を捕えている？」

《鹿》の微笑に、《八橋》も微笑で答えた。

「そなたが何を言うておるのか理解し難いものよ」

知らぬ存ぜぬで通す気だと気付いた二人は、阻む《八橋》を強引に退け、その先へと向かおうとした。だが、その頃になって、《八橋》の配下達が駆けつけてしまい、《猪》と《鹿》は不利になってしまった。

「さあ、己らの眷属を従えて、さっさと立ち去るがいい」

《八橋》に言われ、《鹿》も《猪》も唇を噛んだ。恐らく、この先に行けば、すぐに《蝶》に会えるに違いない。だが、このまま二人だけでは、到底押し通ることなど出来ないだろう。それは、二人の配下達が駆けつけたとしても同じである。《蝶》は向こうの手の

内にいるという事を、忘れてはならない。こんな時、《鹿》と《猪》には、《八橋》を嫉じ伏せるだけの力など持っていないのだ。せめて、五光の追い風を彼女に示す事が出来れば、少しは違う兆しが見えるというのに。ちようどそんな事を考えている折だった。

「騒がしきは煩わしい事よ。もちつと静かにしておくれや」

臯月の宮の庭をからんころんと歩き、そう涼しげに言い放つ者。

その者の姿を見た瞬間、《八橋》の表情が思わず強張った。師走の宮の頭首であり、五光でもある《鳳凰》だったのだ。

「勝手に入ってすまぬのう。だが、五光としては放っておけぬ噂を耳にしたため、勝手に上がらせてもらった」

「これはこれは五光の御一人ともあるう御方が、界限に蔓延する根も葉もない噂を妄信したという事でございましょうか？」

《八橋》はすぐに表情を戻して《鳳凰》に言った。五光がたった一人現れたところで何が出来る、そう彼女は言っているかのようだった。

「いやいや、その根も葉もない噂の真偽を確かめたくなくてね。五光の一人としては、そこな《猪》と《鹿》とを行かせてやって欲しいものよ」

「それは出来ませぬ。これより先は我が宮の聖域とも言える場所。そこを他の季節を崇める者が踏み込むのは到底許せませぬ」

《八橋》の厳しい口調に一蹴された《鳳凰》は、袖を上げて苦笑した。

「それならば仕方ありませんぬの。お続けなさいまし。私は他の者が来るのを待つだけでありましょうよ」

「他の者？」

《八橋》が少し動揺を見せる。《鳳凰》は表情を変えず、続けた。「他の者と言ったら、他の者よ。三光ならば聞き入れて貰えるだろうか？ それとも雨入り？ それとも四光？ 五光集まらねばならぬというのなら、もう少し時間をおくれや」

《鳳凰》の言葉に《八橋》は絶句した。《鳳凰》の言葉はつまり、

五光全ての者が、この《猪》と《鹿》の後押しをするという事である。幾ら他宮を毛嫌いする《八橋》でも、五光の全てを敵に回せばどういふ事になるのか、分からないわけがない。すっかり顔色をなくした《八橋》を、《鳳凰》は微笑みつつ見つめた後、《猪》と《鹿》に告げた。

「行きなさい」

五光からの言葉とあつて、二人は堂々とその先へと踏み込む事が出来た。皇月の宮の聖域と《八橋》の称したその場所は、とても静かで、とても敵かな場所であつた。途中、《菖蒲》が一人で遊んでいる以外には何もなく、遠くで小鳥が鳴いているのが響いているくらい寂しい場所であつた。やがて、突き当りが見え、最後の部屋の扉が現れた。しっかりと閉じられ、開けにくいその扉を、《猪》がこじ開けると、寂しいほどに広い部屋の大黒柱に、《蝶》が括りつけられていた。すっかりと意気消沈し、魂の宿らぬ人形のようになつてしまつていた《蝶》に、二人はすぐさま駆け寄り、抱き起こし、縄を解いてやった。軽い体を抱えて部屋を抜け出した頃、ようやく《蝶》は《猪》と《鹿》に気付いたようだった。だが、何も言わず、ぼんやりと二人を見つめているだけだった。彼女が助かつた安堵感からその目を潤わすのは、五光に対して《八橋》が不服ながらも降伏している姿を見た時であつたという。水無月の宮の者達は、自分達の頭首が戻つたことを大層喜んだ。《蝶》もまた、再び外の地を出られるきっかけになつた全ての者に感謝し、慎ましく水無月の宮へと戻つていったという。

後になつて知つたことだったが、途中、《菖蒲》は寂しそうに三人が去るのを見つめていたらしい。その事に気付いていたのは、その時に廃人のようになつてしまつていた《蝶》一人であり、皇月の宮を逃れた今でも、《菖蒲》の事を按じているらしい。《菖蒲》もまた、《蝶》がいた時間を度々思い返すらしいが、それはまた別の話である。

裏菅原

裏菅原

春の三宮の草木達は、とんでもない話を耳にしてしまった。

事の始まりは、《松》が耳にした春の三宮の《赤衣》達の談笑だった。だたの愚痴かと思った。でも、そのただの愚痴を聞き捨ておけなかったのは、彼女らが話しているのが、他ならぬ自分達の話だったからだ。

「ほんに、我らが宮の草木ときたら御転婆度合いが酷すぎて困るものよ」

春だというのに冬の冷気を思わせる自分の宮の《赤衣》がそう言うのと、盗み聞きしている《松》の胸が高鳴った。彼女達は喋るのに夢中で《松》には気付いていないけれど、本当に気付いていないのか、何度も疑ってしまう。それくらい怖かった。

「我が宮の草木も、此間なんかは隣領の冬の三宮に忍び込もうとして冷やりとしたものよ」

如月の宮の《赤衣》も、睦月の宮の《赤衣》に負けず劣らずの冷気を放っている。彼女達には血がちゃんと通っているのだろうか。通っていたとして、その色は、自分達と同じ色をしているのだろうか。

全部が青い血でも流れていそうだ。

《松》はこっそり思った。如月の宮が言っている話はよく知っている。《梅》は思いつきで行動する人だが、その日は冬を味わいたい気分だったらしい。冬の三宮にいる草木はとても面白い人達で、時折遊びたくなる。《梅》は確か、春の三宮がある春領に、比較的近い場所にある師走の宮の《桐》に会いに行こうとしていたと言っていた。しかし、睦月の宮の防人、サミドリとトシ八に見つかってしまい、あの雪女のような自分の宮の《赤衣》を通して、如月の宮

の《赤衣》に返還されたい。その光景を思い浮かべるだけで、《梅》には同情できる。そもそも《赤衣》という輩は、自分たち草木を管理するとか何とかの立場を利用して、ヒステリックな感情を剥き出しに、たびたび襲い掛かってくるのだ。春の三宮の草木には《赤衣》という母がいていいものよと他の宮の者は言うけれど、それは全くの見間違い。居たって邪魔なだけだ。《青衣》のいる輩と《赤頭巾》のいる輩も同じことを言っていた。そのどちらもが唯一居ないのが、師走の宮の《桐》なのだ。あそこは、防人が三人いる。他は、宮頭の《鳳凰》がいるのみ。だから、師走の宮の草木達は、集まって遊ぶ時には師走の宮に遊びに行くらしい。

「全く《桐》の羨ましい事よ。あそこには甘ったれの《鳳凰》に、頭の上がない防人三人しかおらんのだよ」

そんな事を言う草木は、《梅》に限らなかった。事実、《松》だってそうだろうと問われると、否定できないというものだ。そして、《赤衣》の話を持ち聞きした今だからこそ、一層の事だった。

今、言った事は何か？

それは、弥生の宮の《赤衣》が言ったのだった。それも、冗談を言う顔つきではなかった。いや、冗談かどうかはともかく、《松》にとつて、それを言ったのが睦月の宮でも如月の宮でもない、弥生の宮の《赤衣》だった事が衝撃的だった。《赤衣》の中でも、一際朗らかしていて、少しは温かみのある血でも通つていそうな弥生の宮の《赤衣》。そんな彼女が言い出した事が、《松》にとつては衝撃的だった。

「草木の管理の仕方が甘いのです。あの子らはちと懲らしめてやらねばなりません」

「して、どのように？」

「そうね、宮の奥、御堂の大黒柱にでも括りつけてしまえば宜しいかと」

弥生の宮の目はつりあがり、とても冗談を言っているようには見えなかった。その言葉に優雅に笑って見せる睦月の宮と如月の宮の

《赤衣》達の表情もまた、冷淡なものだった。

「それはいい、それはいい」

くすくすという笑い声が《松》の頭の中を駆け巡り、全身から汗を押し出し、心の底から震え上がらせる。鬼だ。悪魔だ。奴らは魑魅魍魎の類に違いない。そうだ、この事を一刻も早く、《梅》と《桜》に伝えねばなるまい。そう《松》が走り去った結果が、今である。

《梅》は驚愕し、《桜》は蒼白になった。皆、《赤衣》達がそんな真似をするわけがないなんて思わなかった。いや、奴らだからこそ、やりかねないのだ。そう思うと、各々の宮に帰るのがとても怖かった。のこのこと帰るわけにもいくまい。

「もうこの春の領にはおれん」

《梅》がそう言った。

「ここはやはり、師走の宮を頼るのがよかる？」

その一言が、この壮大な脱走計画の始まりだった。そうと決まれば、三人が集まったところはともまらなかった。彼らが集まったのは、弥生の宮。《赤衣》達の談笑する春の御堂の近い如月の宮には無論近づけず、かつ、各々の宮頭の目が光っていない場所がよかったのだが、睦月の宮では頭の《鶴》が如月の宮の頭《鶯》を招いていたし、弥生の宮の頭《桜》は長月の宮の頭《盃》に誘われて不在だった。となると、冬の領へと向かうには、如月の宮と睦月の宮の傍を通らなくてはならない。

「夏の領ならすぐ傍。師走に拘らずともよいのではないか？」

そう《桜》は言ったが、いんやと《梅》は首を振った。

「ただ逃げ込むんじゃない。そこに住みこむんじゃない。だから、《赤衣》は勿論のこと、《青衣》も《赤頭巾》も居ては困る。彼奴らがいないところは、師走の宮しかない。そういう事じゃ」

「なら、短時間で冬の領へと迷い込む方法か、夏の領から冬の領へと入り込む方法を考えましようて」

「そうしよう、そうしよう」

草木達の考えはとても短絡的だったかもしれない。けれど、三人とも、《赤衣》に捕まえられて、御堂の柱にでも括りつけられた日には、気がおかしくなってしまうだろうと怯えていた。特に《赤衣》達は日頃、癩癩を起こすかのように草木達を叱りとばすものだから、彼女らの談笑が軽い冗談には聞こえなかったのだ。そんな計画が持ち上がっている以上、今すぐに計画を実行しなければ意味がない。

だから、師走の宮へと忍ぶ話が持ち上がった途端、草木達は放たれた弓矢のようにその場を飛び出し、まずは夏の領めがけて駆けていったのだった。彼らは至って真面目だったのだけれども、春の三宮の防人が見たとしても、彼らが遊んでいるようにしか見えなかっただろう。否、それが却って、彼らには有利に働くというもので、彼らは心おきなく春の領を駆け巡り、夏の領へと向かう事が出来た。とはいえ、所詮は子ども足である。

「御領はどうしてこうも広いんじゃ」

《梅》がそう嘆きだしたのも、まだ春の領を抜け出してもいない内の事だった。

「これなら、最初から冬の領を目指した方がよいのじゃなからうか？」

「いやいや、どちらも同じはずよ。それ、あと少し、あと少し」

《松》が励ました所で《梅》の疲れが取れるはずもなく、それから幾分か走ったものの、ついに《梅》は座り込んでしまった。

「もう無理じゃ、もう無理じゃ。少し休もう」

《梅》をもう一度励まそうと思った《松》だったが、その言葉聞いた途端、今まで気付かなかった疲れがどつと身体の中からあふれ出して、喉まで出かかった言葉もその疲れが引きもどしてしまった。

「それもよからう。少し休憩しよう」

《桜》もそう言うので、《松》は項垂れるように頷いた。確かに至極疲れた。気が急いで、早く、早くと思ったものの、考えてみれ

ば、もう少しゆとりを持って大丈夫かもしれない。《赤衣》達は世間話に夢中で自分達の脱走には気付かないだろうし、防人達が気付いたとしても、まさか、春の領を抜け出そうなどと思つてはいないだろう。ちよいとばかりゆっくりしても、何の問題もないかもしれない。

「分かった、分かった。けど、少しだけ。少しだけよ?」

《松》が渋々納得すると、《桜》も《梅》も思い切り寛ぎ始めた。もう、少しだけと言つたのに、と《松》は思うたが、一度腰を下ろせば、思つてもみなかつたほど安堵の息が漏れる。足も気付かぬうちにじんじんと腫れており、すり剥いたのが、ひりひりと痛む。これは、思つていたよりも長く険しい旅になりそうだ、と《松》がそつと思つていたちようどその頃、春の三宮では防人達が己が草木共がおらんと慌てていた。ふと、草木達はどうしているかと気にかけた如月の宮の《鶯》の一言がきつかけに発覚したこの事態は、まず、如月の宮の防人達の血潮を瞬く間に凍らせ、春の三宮付近、そして春の御殿の傍の何処かに潜んでいやしいかと血眼になって春の領中を捜し回る如月の宮の防人、《ユキキエ》と《ハツハナ》の姿は、睦月、弥生の宮の防人達をも震撼させ、同時に、気付かせた。直ちにこの事実は春の御殿で談笑中の《赤衣》達に伝えられた。《赤衣》達の機嫌を損ねるのではないか、そのとばつちりを喰らうのではないか、と防人達は恐る恐る報告したのだが、予想外な事に、《赤衣》達は、留守中の取るに足らない言伝を貰つたかのように、つまらなさそうな顔をして、口々に言つた。

「お前達、そんなつまらない事でそわそわしていたのかえ?」

「こんな事で慌てておつたら、彼奴らのいいカモにされてしまうよ」

「どれ、ただ突っぱねるのは可哀そうだから、我らの一声でちよいと呼び戻してやろうじゃないか」

防人達がぼかんとしている中、《赤衣》達は音も立てずに歩き、それぞれの宮へと帰って行つた。防人達が各々の宮の《赤衣》の背を追つたのは、それぞれの姿が大分小さくなつた後だった。

一方その頃、春の三宮の者達が自分達の脱走に気付いたことも露知らず、《松》、《梅》、《桜》は、そろそろ夏の領に向かつて歩き出そうとしていた。立ち上がった時に、《松》の腹が小さくなつたのだが、その時は《梅》と《桜》の二人も、《松》本人も、笑つて済ますほどの余裕があつた。そう、その時は、である。歩いて歩いて歩くうちに、先程《松》の腹が鳴つた事を、《梅》と《桜》の二人は次第に怨むようになっていた。それは、《松》本人も同じ事で、性懲りもなくまた鳴ろうとする腹に、ほとほと呆れていた。ついで、湧きあがってくる不安もあつた。それは、果たして、他所の宮で美味しい飯を貰えるのかどうか、という事。それぞれの宮では、出される食料も違ふという。試しに、昼食の残りを三人で持ち寄つてみたところ、確かに違ふものであつた。そして、分かつた事は、他所の宮の食べ物は、口に合わないという事。

ああ、重大な事を忘れていた。

《松》は冷や汗をかいた。《梅》と《桜》も忘れてるだろうか。ちゃんと告げなければなるまい。……責められる事は覚悟して。

と、《松》が覚悟を決めたちようどその時、《松》、《梅》、《桜》の三人をさらに足止めする匂いが漂つてきた。それは、春の三宮から。とても、美味そうな匂いだつた。ほかほかの飯を炊いた時の匂い。まさか、それがこんな遠くまで匂つてくるはずがない、と三人は思ったのだが、この匂いには抗えなかつた。

「ねえ、思ふのだが」

《桜》が口を開いた時は、すでに三人の口は、涎で一杯だつた。

「今日のところはこれで戻つてもよくはないだろうか？」

《松》も《梅》も、何度も首を縦に振つた。そうになると、今までの足の痛さなど忘れ、急いで自分達の宮へと走り出すのだつた。走れば走るほど、飯を炊く匂いは強くなつていく。幻などではない。確かに、炊いているようだ。嗅げば嗅ぐほど、三人の足は速くなつていく。早く帰らなければ。早く帰つて、美味しい飯を強請ねだらなければ。

こうして、三人の脱走計画は失敗に終わった。だが、代わりに、お八つとしてそれぞれ美味い握り飯を《赤衣》から貰ったので、全く気にすることはなかった。ほくほくした握り飯を齧りながら《松》は、頭を撫でてくれた己の宮の《赤衣》を見上げた。その顔は、妖怪でも、鬼でも、魍魎魍魎の類でもなく、愛情にあふれた、母親そのものだった。

ちなみに、草木達の脱走が発覚するきっかけになった如月の宮の《鶯》はというと、《梅》が戻るなり、《赤衣》以上に歓喜しながら《梅》に抱きつき泣きわめき、それはそれは大変な騒ぎとなったのだが、それはまた、別の話である。

1111

1111

そもそも如月の宮の主たる《鶯》が、かのように気弱であるのは、春の他宮である睦月の宮頭《鶴》や弥生の宮頭《幕》と違って、自分だけが五光の権威を持たないからだけではない。その主因は他にもあった。夏の三宮の一つ、卯月の宮の頭《杜鵑》の所為である。

《鶯》と《杜鵑》は何故だかそりが合わず、《鶯》はそれを有耶無耶にして誤魔化してしまおうとしているのだが、《杜鵑》はなかなか許してくれず、《鶯》とたまに顔を合わせる度に、嫌みの一つか二つを言い放ち、かといって、《鶯》がいなければ、《鶯》は何処に行きおつたと騒ぎ出すので、《鶯》はどうすればいいのか全く分からなかったのだ。そもそも春の宮と夏の宮の隔たりがあるのだから、放っておいても問題ない、と《鶯》も思ったのだが、不運にも冬越し会合という春の領、夏の領、秋の領から代表の一人が集まる会合にて、卯月の宮頭の《杜鵑》と当たってしまったのだ。これより、定期的に顔を合わせなければならぬとなつたわけで、《鶯》は変更できるのならば、誰かに変わっては貰えぬだろうかと思つた。しかし、そんな事を《鶴》や《幕》に頼めるはずもなく、とぼとぼと定期的に開かれる小さな会合に向かう事となるのだ。つた。

ただ、その気持ちを零すことのできる相手が居た事だけは救いだつた。葉月の宮の《雁》である。《雁》は葉月の宮の頭首ではないが、秋の宮の代表として選ばれていたのだ。だから、《杜鵑》がほぼ不満の全てを《鶯》に押し付けてその場を立ち去って終わる会合の後も、《雁》が居るからこそ、《鶯》も最終的には落ち着いて春の領へと帰る事が出来るわけだつた。

《雁》と二人でいるときだけは、《鶯》の口も正直となり、《杜鵑》への積もり積もった不満を吐き出しては、泣き、吐き出しては泣き、を繰り返しているうちにそのうちすつきりとしていく、といった具合だった。このやり取りが何度も繰り返されていたという事が、そもそもの始まりだったのかもしれない。

と、いつものも、《鶯》が会合に行ったまま行方知れずとなったのだ。

《雁》によれば、《鶯》が《杜鵑》の悪口を次から次に述べているその場所に、たまたま運悪く《蝶》が通りかかり、物凄く恐ろしい形相でこちらを睨んできたという。これは、《蝶》に疑いの目がかからないはずもなく、春の他宮の《鶴》と《幕》の二人は、《雁》を引き連れて夏の領は水無月の宮へと訪れた。水無月の宮の《蝶》は、彼らをすんなりと通し、接待したが、話が《鶯》の事となるや口を固く閉ざし、知らぬ存ぜぬの一点張り。《五光》の《鶴》や《幕》とて彼女の口を開かせる事なんて出来ずじまいだった。

しかし、《蝶》が何かを知っているのは確かなこと。

《鶴》と《幕》、《雁》はどうか《蝶》が口を割る方法はないだろうかと考えた。そしてついに、《雁》が思いついた。同じ領である文月の宮の《猪》に協力を仰ぐのだ。心を許している《猪》となれば、《蝶》の心の氷すらも溶かせる事が叶うかも知れない。

幸い《猪》は、話を聞くや顔色を変えて、「すぐに向かおう。しばしお待ちを」と、あっという間に支度を整え、共に水無月の宮へと向かってくれた。

今度は仲のよい《猪》も一緒となって、《蝶》の心は揺れた。が、《蝶》の答えは変わらなかった。しかし、《蝶》が本当に知らないという事はないだろう、というのがその場の見解だった。たった今《蝶》の様子を観た《猪》もまた、何かを隠しているに違いないというほど、《蝶》の様子は怪しかったのだ。

「かのようなことは、《鹿》がうまい。《鹿》にも協力を仰ごう」と、いう《猪》の意見により、皆はそのままの足で冬の領は神無月

の宮の《鹿》の元へと向かった。《鹿》もまた、《猪》と同じく、話を聞くや否や驚き、すぐに支度を整えて共に夏の領へと向かってくれた。

今度の今度は《猪》だけでなく、《鹿》まで一緒に来たとあって、《蝶》はいよいよ動揺を隠せなくなった。頑なに知らぬ存ぜぬを繰り返したが、《鹿》の朗らかな説得に段々と心を揺り動かし、冷たく凍った心を溶かして、やがて、はち切れたかのように泣きだした。因れば、確かに《蝶》は《鶯》に対して激しく怒っていた。というのも、もとより夏の領には誰も五光が居ないと言う事に負い目を感じていたというのに、五光が二人もいる春の領の《鶯》が、夏の領の《杜鵑》の陰口を叩いていたからだ。勿論、理由には心当たりがあった。《杜鵑》が《鶯》に辛くあたっている場面をごく少しだけ目撃した事があったからだ。しかし、それでもその場の怒りや嫉妬は強いもので、《蝶》は出来心で、その不満を独り言として、水無月の宮で漏らしていたのだという。

それを誰が聞いていたかは、《蝶》もはっきりとは知らない。だが、知らないのは本当でも、実は心当たりはあったのだという。もしも、水無月の宮の《牡丹》が《蝶》の陰口を耳にしていたとしたら、もしも、《牡丹》が夏の領の《藤》と《菖蒲》にそれを話していたら、もしも、その話が回り回って、《杜鵑》や《八橋》の耳に入っていたら。

そう思うと、怖くて他の者にも聞けなかったのだという。

だから、この事態は《蝶》のせいだけけれども、《鹿》も《猪》も《蝶》を責めることは出来なかった。それは、《雁》も《鶴》も《幕》も同じことだった。それに、問題は、《蝶》が悪いか悪くないかではなく、《鶯》が何処にいるかである。疑わしいと言えば、《蝶》も《杜鵑》も《八橋》も同じほど疑わしかった。ただ、《蝶》は違つと言つし、そう思うのなら水無月の宮を捜してみると言いつつ、この言葉に甘えて宮中を検めたところで、《鶯》は見つからなかった。

なので、《雁》は《杜鵑》を疑い、検められた《蝶》は、《八橋》を疑っていた。

「《八橋》は気に入らない者を悔い改めさせる癖がおありなの」
恐ろしい癖として、《蝶》は覚えていた。なるほど、《八橋》には前科がある。皐月の宮は、いつだって《八橋》を怒らせないようにとぎすぎすしているのだから。《菖蒲》もいまだに自由に外に出られずにいるし、皐月の女王を怒らせないように、防人達も他の宮よりもずっと大人しい。怪しむべきは、悪口を言われた本人よりも《八橋》の方であった。

そこで、《雁》をはじめ、《鶴》に《幕》、《猪》、《鹿》、そして《蝶》の六人は、まとめてまずは皐月の宮を訪ねたのだった。だが、《八橋》はすぐには出てこなかった。どうしてだろうかと、思っていると、やがて皐月の宮の《赤頭巾》が顔を出し、六人に膝をついた。

曰く、
「我が宮の主は只今臥せております。看病のために、と、弥生の宮の《鶯》殿が訪ねておられたようでございますが、先程、卯月の宮の防人達に呼ばれ、お帰りになられた次第でございます」と。

これを鵜呑みにしていいものか、六人には判断がつかなかった。そこで、《鶴》が一言、「検めさせよ」とかけたのだが、主である《八橋》が臥せている以上、それは出来ない、と《赤頭巾》は引こうともしなかった。六人がそこへ食い下がっていくも、皐月の宮へは一步も上がることが出来ずじまいだった。

仕方なしに、六人は卯月の宮へと訪ね、《杜鵑》に話を聞くことになった。だが、《杜鵑》は《鶯》が居なくなつた事自体を知らなかったようだった。卯月の宮の防人達が訪ねたという事も知らず、また、卯月の宮の防人であるコノハトリもナツハも、皐月の宮へと行っていないと述べた。念のために、検めたものの、《鶯》の気配すら見当たらなかった。

これは皐月の宮を疑わない理由もないだろう。

そう考えた六人は、再び皐月の宮へと向かった。卯月の宮を訪ねた事を盾に、《赤頭巾》に詰め寄った所、ついに《赤頭巾》は折れ、卯月の宮の防人が来たという事は嘘であったことは認められた。だが、《鶯》が帰ったのは事実で、その理由は助けたはずの《八橋》に酷い言われようとしたからであり、嘘をついたのは、我が宮の主の失態を隠したかったための咄嗟のものだと述べた。

今度こそ、《赤頭巾》が嘘をついているようには見えぬ、また、その弱みに付け込んで皐月の宮を検めたものの、幽閉されている《菖蒲》以外には、怪しい物事など見つからず、《鶯》捜しは再び原点へと帰る事になってしまい、六人は途方に暮れる事となった。

しかしそんな折、《鶯》の目撃情報は思わぬ場所から漏れてきた。冬の領である。誰も冬の領など範疇になかったため、その情報には啞然とした。なんせその場には冬の領の者である《鹿》もいるのだ。その情報をもたらしたのは、神無月の宮の防人であるコハルとシグレだった。曰く、《青衣》が《紅葉》に付き添い冬の領を歩いていったところ、《鶯》によく似た者が師走の宮の方角へ歩いて行くのが見えたとのこと。それも、一人ではなく、二人。もう一人の方はよく分からなかったとのことだった。

《鹿》はすぐさまコハルとシグレを師走の宮へと走らせた。同時に、春の宮の御二方、《鶴》に《幕》を案内しながら冬の宮へと帰り始めた。他の者達も気にはなつた者の、行く先が五光の《鳳凰》の住む場所と知っていたので、ついて行く気にはなれなかった。

さて、師走の宮にて、《鶯》は居た。そう、もともと《鶯》は失踪などしていなかったのだ。《鶯》曰く、帰ろうとした折、春の宮にて迷いこんだ《桐》が、酷い怪我をし動けなくなっていたという事で師走の宮へと送っていたのだそうだ。それを聞いて、《鶴》も《幕》もほっと胸を撫でおろした。そもそも、初めに《鶯》が消えたのだの、攫われたのだの言いだしたのは何故だったのか、と思慮する一方、何ともなくてよかったという気

持ちの方が勝り、もやもやとした気持ちも《鶯》と《桐》の笑顔にて消えてしまった。

その他の者達も、ああ、めでたしとすぐに安心し、各々の宮へと戻っていった。

すぐに納得出来なかったのが、疑われた者たちだったが、その者達は後日《鶯》のもとより届いた頬も落ちる様な香ばしさの梅饅頭により、皆皆機嫌をなおしていったらしい。

そして、かうも疑いが疑いを呼ぶような面倒なこと、二度と起らないで欲しいと、夏の宮頭達は饅頭を頬張りながら思ったといっただとか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0903k/>

四季

2010年10月8日14時14分発行